



# アーカイブ 通信 No.16

No.16

2019.7.1

◆編集・発行：  
ネットワーク・市民アーカイブ  
◆tel: 042-540-1663 (事務局)  
tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)  
E-mail: simin-siryu@nifty.com  
www.c-archive.jp  
〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)  
◆正会員 1口 6,000円、賛助会員 1口 3,000円 / 年  
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226  
口座名：市民アーカイブ

開館5周年記念講演会報告

5月19日(日)たましんRISURUホール

## 記録・アーカイブする意味

### —現在の民主主義を問う—

講師・瀬畑 源さん(日本近現代史研究者)

開館5周年記念講演会では、日本近現代史の研究者でアーカイブズ問題にも造詣の深い瀬畑源さんをお招きしました。

天皇制に関するご自身の研究のため情報公開請求を行なったことをきっかけに訴訟まで体験される中で、思いがけずアーカイブズ問題の専門家となられました。制度の経緯を含め、具体例に基づきながら、「記録・アーカイブする意味」について、私たち主催者が大切にしなければいけないこと、当会の課題や意義にも引きつけて、わかりやすくお話しいただきました。

#### ●「なぜ」がわかる資料を探して

私は公文書管理問題でよく講演に呼ばれて話をしますが、本業は歴史研究者で、象徴天皇制がどのように国民に受容されたのかを研究しています。

公文書管理問題に関心を持つようになったのは、宮内庁へ情報公開請求をしたところから始まります。私が知りた



した。そこで、福田康夫官房長官(小泉内閣当時)の公文書管理制度改革の動きを知ることになりました。

#### ●歴史資料を残すために、現在の管理が必要

福田氏は歴史好きで、日本の公文書館が重要な歴史資料をきちんと保存できていないのではないかとという問題意識を持っていました。歴史資料が残るためには、現在の文書もきちんと作成され、管理されなければならぬという思いのもと、2008年に首相になった福田氏は、公文書管理法制定を目指しました。

この時、ウェブ上でこの問題を系統立てて書いているのが私だけという状況があり、次第に注目を集めるようになりました。本を書かないかと依頼をされ、公文書管理制度を歴史的に考えようとして書いたのが、『公文書をつかうー公文書管理制度と歴史研究』(11年)です。その後、『公文書が政治問題化する中で』、『国家と秘密 隠される公文書』(久保亨氏と共著、14年)、『公文書問題 日本の「闇」の核心』(18年)、『公文書管理と民主主

義—なぜ、公文書は残されなければならぬのか』(19年)と本を書き続けることになりました。

#### ●情報公開制度を身につける

ただ、ここまでたどり着くには、さまざまな困難がありました。私は行政法を学んだことがなかったため、情報公開制度を理解することが大変でした。墨塗りになっても、なぜそうなるかわからず、なぜ文書が公開されても、文脈が理解できないので、どのように利用してよいかかわらない。資料を読み解く力を身につける必要を強く感じ、専門家の方にうかがったり、自分で本を読んだりしながら、知識を身につけていきました。

#### ●主権者として必要なこと

「情報が行き渡っていない、あるいは入手する手段がない『人民の政府』なる存在は、笑劇か悲劇の序章か、あるいはその両方以外のなものでもない。知識は無知を永遠に支配する。だから、自ら統

治者となろうとする人々は、知識が与える力で自らを武装しなければならぬ。この言葉は、ジエームズ・マディソン（米国第4代大統領）が友人にあてて送った手紙の一節であり、米国の情報公開運動をされている方にはよく知られています。

官僚制研究の大家であるマックス・ウェーバーは、官僚は情報を独占する本能があると分析しています。知識を独占すれば他の政治勢力より優位に立てます。ですので、反対する根拠となる情報を与えない方が、彼らにとつては都合が良いのです。

よって、国民が「主権者」となるためには、自らが政治的な判断を行うための「知識」を入手し、「分析」できる力（＝武装）を持つことが重要になります。この情報の不均衡を是正するために、行政の持つ文書に対するアクセスを保証する、情報公開制度が必要とされるわけです。

### ● 公開に耐えうる作成・管理を

残念ながら日本では、政策決定のプロセスがなかなか可視化されません。政策が決まる際に、なぜその政策が必要なのか、政府の一方的な説明だけでなされる傾向があります。プロセスが公開されないと、市民が議論し意見を述べるために必要

な知識が入手できません。

情報公開法は「文書」の公開を要求する法であるため、これを機能させるには、文書がきちんと作成され、管理され、保存される必要があります。そのため、11年に公文書管理法が施行されることになりました。

公文書管理法は「文書のライフサイクルを一元的に管理」する法律です。文書が作成され、保存され、保存期間が満了した

ら国立公文書館等に移管して永年保存するか、廃棄するかなどを決めていきます。

公文書管理法の第一条では、公文書は「健全な民主主義の根幹を支える国民共有の知的資源」であり、公文書をきちんと管理することは一現在及び将来の国民に説明する責務のためであると書かれています。公文書の適正な管理は、民主主義のため、行政のため、検証のために必要なのです。また、政策決定過程がわかる文書を作成する義務なども定められました。

不十分な点はまだありますが、公文書管理法によって統一的なルールができたことは大きかったと言えます。

### ● 何を資料とし、どう活かすか

そもそも歴史資料とはなんでしょう。古い文書だけが歴史資料ということではありません。歴史資料として何を見なすかは、保存しようとした人たちの思いであり、営為であると思います。地域に歴史資料を残すとは、地域の人たちが何を資料とみなしていくかが重要だと考えます。

歴史資料を保存、公開する施設であるアーカイブズは、歴史研究者のためだけのものではありません。コミュニティの構成

員の記憶を検証し、それを活用することで現在の活動に活かしていく場だと思えます。

### ● 残したいという強い意思

02年に都立多摩社会教育会館の市民活動資料の収集・提供事業が石原都政により廃止された際に、残された資料を保存、移管する運動が立ち上がりました。

これらの資料は法政大学に最終的に移管されましたが、02年以後に収集している資料を基に、14年に市民アーカイブ多摩がオープンしました。この市民活動資料が保存されたのは、残そうとする意志のある人たちがいたからです。

市民活動資料の価値は、本会代表の町村敬志氏によれば、行政が認識していない（しようとしな）各時代の矛盾や問題に、いち早く現場から上がる声を記録していること、今を生きる人びとが理想や理念を実現していく実践を記録した、社会全体にとつての知のストックであること、ミニコミなどを通してネットワークを結び、新しい関係や世界を創造する器であることとを挙げています。

市民活動資料の収集を行政が行うことは、誰が何を収集するのかという評価選別の問題を常に抱えることとなります。中立

性の問題を考えた場合、ヘイトスピーチをする団体のミニコミまで図書館が収集するのかわれば、簡単ではないでしょう。そのため、図書館や公文書館でも、扱づらい側面もあるかと思えます。

### ● パワーが集結する場所

ただ民間アーカイブズは、どこも金銭的、人的な問題を常に抱えています。最終的には「活用」に繋げないといけません。かなりのパワーが必要になります。ですが、市民アーカイブ多摩は、そのパワーでもって運営されている貴重な場所だと思えます。

アーカイブズ学の安藤正人氏は、「草の根文書館（コミュニティ・アーカイブズ）」の重要性を指摘されています。「地域の記録遺産は、できるだけその記録が生まれた場所で保存し公開するのが一番いい」と。地域の中で有効活用されることが最も大事です。（瀬畑・記）

### 質疑応答

**参加者** 他国はどうか。政策過程の文書記録を残している事例はあるか。

**瀬畑** アメリカでは残すことが習慣化されている。大統領に関する記録は残すという慣習



が、二クソンの経験をもとに続いている。執務室の会話はすべて録音され文字化される。大統領が読んだものも記録される。市民の要求が強いので、残さないで批判される。

**参加者** 公文書管理法を今後どう充実させていくのか。公開はどのくらいでされるのか。日銀の政策委員会の記録は公開される。

**瀬畑** 日本の場合、行政文書は30年経つと公文書館に渡され、公開されるのが原則。ただし最終決定の文書だけが保存対象だと考える官僚が今もいて、法の運用が骨抜きになっている面もある。日銀のケースは日本では例外的である。

**参加者** 以前と比べれば公開されるものは増えたが、公文書だけでは限界がある。手紙やメールなども保管される必要がある。公開から落ちてしまう資料についてどう考えるか。

**瀬畑** 公文書には公の側から見た真実が書いてある。私文書を公文書と突き合わせていくことが、これからも重要。ただし手紙から電話、さらにメールやラインへと変化するにつれ、私文書は残りにくくなっている。それだけに公文書の側で残す努力も必要である。オール・ヒストリーも重要だが、語りが事実かどうかの判断は難しい。

**参加者** 資料が秘匿されている可能性もある。どこまで捕捉されているのか。

**瀬畑** 秘匿資料は、まず公文書扱いされているのか確認する必要がある。冊子体になっている場合など、公文書から外されている可能性もある。

**参加者** 「市民アーカイブを行政がやるべき」という意見をめぐる議論は興味深い。資料の思想性の問題や資料形態によってどこが集めるか、という問題もある。

**瀬畑** たとえば右翼運動の資料を集めることに意味がある場合もある。ただしそれをどこで集めるか。図書館は公開が原則なので収集が難しい。

**参加者** ミニコミのアーカイブは基本的には地域でしか収集できないので、図書館の行政郷土資料室の仕事だと考えていた。でも実際に市民で運営してみると行政ではできなかったことができていた部分もある。市民だからこそできる活用についてアドバイスを。

**瀬畑** 学生への利用機会拡大やミニコミ紹介などもある。ミニコミの場合、それを理解するのに必要な状況・背景の説明はミニコミに書いていない場合が多い。読み手に対して背景を紹介するような機会や講座などがあるとよいのでは。

**参加者** 多くの図書館では地域

資料を集めているので、ミニコミも図書館で収集するのが理想ではないか。

**瀬畑** 図書館は行政資料や地域資料を集めている。ただパンフレットやミニコミまでは集めない。図書館の場合、既に発行されたものという縛りがあるし、市民活動資料は自治体を超えるケースもある。長野県飯田市では生活記録運動が盛んで作文集が多く作られ、図書館職員により収集され、今では貴重な資料となっている。ただし司書の力量に左右されてしまう。収集を反対する人が現れた時には対応する力量も必要となる。これからの図書館はアーカイブに手を伸ばさないで生き残れない可能性もあり、その場合には地域資料だという考え方もある。ただし図書館で集められるのか、難しいところ。

### 参加者の感想

・民主主義というのは、自分たちで考え、決めていくことだと思ふ。アーカイブズを利用し、育てていくのも、市民の民主主義への向き合い方。

・公文書と情報公開の概論を理解できた。が、情報公開、公文書の両方とも限界が多く存在することもわかった。

・収集・提供は一元的に行政に頼るべきではない。電磁デジ

タル化するなどの工夫で保管場所は解決できる。ただし、個人情報には要注意。

・アーカイブズはNHKの映像というイメージで興味を持ちました。年金の消失、モリカケ問題にしても、私たちの大切な税金や年金の使い道をもっと正しく情報公開していただきたいです。

・市民運動を拡げる上でとても大切なお話をたくさん伺えて参考になった。

・ミニコミ収集については、ど

のように各自治体で具体化するのかが難しい問題。

・公文書は、政策決定過程を知る上で重要である。

・タイトル以上の内容で、わかりやすかった。もつと情報公開請求をして、自分だけではなく相手にも経験知を積ませるのが大切だと思った。

・国民は、公文書から何を知るために行政に公文書開示を要求しているのか、問題提起をきちんとしなければならぬと気づかされた。

### 夏 サンゴジュ

夏になると樹木が生い茂り、当館の頭上は真っ赤な実で彩られます。木が猛暑を吸収してくれる、室内は少し温度が下がります。昆虫たちも賑わう季節です。



サンゴジュは関東地方から台湾にかけての暖地に自生する常緑樹で、台湾のものを変種として区別することがあります。よく育つと高さ10メートルにもなります。厚みのある楕円形の葉が混んでつき目隠しに適當であることと、別名アワブキとも呼ばれたよう



（邑田仁・むらたじん）  
元東大小石川植物園園長

# ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信ミニコミを、発行者の方に紹介していただきます。

## ABC企画NEWS

1931年の9・18事変を機に、日本は中国東北部を占領し、偽滿洲国を設立して14年間にわたって植民地統治を敷きました。731部隊は36年秋に「勅令」(天皇の命令)によって正式に編成され、現・黒竜江省哈爾濱市郊外に巨大な実験施設を設立しました。国家的組織犯罪はもとより、医学部教授や医師たちが「軍事医学の研究」の名の下に「人体実験」という殺人行為を行い、中国各地で「細菌戦」を実施しました。

展全国巡回展(93年)を行ったことが活動の始まりです(当時の名称は「731部隊展全国実行委員会」)。その後95年に「日本軍の毒ガス戦・遺棄毒ガス」問題を取り上げた「毒ガス展」を創立、会の名称も「ABC企画委員会」と改称しました。

原発・核(アトミック)のA、細菌戦・生物兵器(バイオ)のB、毒ガス戦・化学兵器(ケミカル)のC、各兵器の英語頭文字をとって全ての戦争に反対する意味です。会報も名称に合わせて『ABC企画NEWS』になりました。会の主な活動が「731部隊展・毒ガス展」展示会開催、731部隊・毒ガス問題と歴史認識などに関する講演学習会や731部隊遺跡保存と世界遺産登録を目指す活動、侵略戦争の爪痕を訪ねるスタディツアー等であるため、会報内容は講演学習会や活動報告、中国「侵華日軍第731部隊罪証陳列館」便り、731部隊遺跡紹介、スタディツアー報告などです。どうしても報告記事が

## クッキングハウスからこんにちは

32歳で精神科ソーシャルワーカーになり、長い年月、入院していた人が退院して、地域で暮らすことのサポートを始めた時、精神科医療と福祉の貧しさが大きな壁として立ちほだかかってきた。行政も病院も変えられないなら、自分の足元で、できることから始めようと、1987年、調布の街でワンルームマンションを借り、「クッキングハウス」を開いた。毎日おいしいご飯を作って一緒に食べて、語り合うことができた。病院ではなく地域で人間らしく暮らしていい主になり、投稿や寄稿文が少ないこと、編集委員が少ないのが悩みです。

95年名称変更後、隔月発行して現在120号になります。

日本政府は戦後74年経った今も、毒ガス、731部隊・細菌戦の加害と被害の事実を認めず、中国の被害者に対する謝罪と補償を行っていません。人道に反し、国際条約に反した日本軍の戦争犯罪は、政府が否定し続けられたらと、歴史から抹消されてよい問題ではありません。世論の力で解決することを目指して会の存続と会報発行を続けたいと思います。

(和田千代子)



・1987年創刊、1200部、B5版、12頁、モノクロ、年6回  
 ・年会費5,000円(正会員)、3,000円(賛助会員)  
 ・E-mail : info@cookinghouse.jp  
 ・tel・fax : 042-498-5177  
 ・当館所蔵 = No.113(2007年) ~  
 ・185号内容 = 総会で会いましょう、報告「前田ケイ先生米寿記念ソシオドラマ」「ハパラギンギンコンサート上映会」「スペシャル旅 in ベトナム」他

るかもしれない。病院で、自らの人生を諦めたように固い表情で俯いている「患者さん」と呼ばれている人たちと、生きる希望を見つけていきたい。何よりも笑顔が見られたら、どんなに嬉しいだろうと願った。やってきたことは、安心感のプレゼントと、その人の中にある可能性を信じ、少しでもいいところを発見したら、心からほめること。

こんな小さな居場所があるだけで、少しずつ顔をあげ、笑顔をみせ、自分の気持ちを伝えてくれるようになった。私は希望が見つかった気がして、誰かに伝えたくて、手書きで『クッキングハウスからこんにちは』という通信を発行し、どこに行くにも持って歩いて、日々の感動を伝えた。当初は400部発行。私の文章から感じたことを、当時13歳の娘がイラストに描いてくれた。少しずつ賛助会員も増えていった。紙を自転車に積み、印刷機を借りて2か月に1回、発行し続けた。

クッキングハウスの場も現在

3つになり、心病む人たちがメンバーとして60名、自分のペースで通い、元気になって、かなり快適に地域で暮らしている。

賛助会員も全国に千名となり、通信は、1200部発行(次号まで足りず、300部は増刷)。今は印刷機もあり、発送作業もメンバー、ボランティアの方々の活気ある楽しみな行事になっていく。発送を終えると、必ず読み合わせをし、私たちの活動の願いや希望、苦勞もシェアし合う。この時間があるから、皆の思いの集った通信なのだと確認できるのだ。

クッキングハウスの理念が具体的な活動となって、実現できていることをイラストいっぱいの記事にする。

心病む人たちが伸び伸びと生きていける社会は、どの人も心豊かに生きられる社会であるはず。私たちは、弱い立場であるからこそ、平和のメッセンジャーでありたい。平和への思いを込めて、福祉文化を希望として発信している。

(松浦幸子)

731部隊・毒ガス実験の真相  
 1931年9月  
 2019年8月  
**ABC企画NEWS**  
 4月号(18頁) 5月号(18頁) 6月号(18頁) 7月号(18頁) 8月号(18頁)  
 編集・発行: ABC企画委員会 〒145-0045 東京都小平市学園町1-22-151F  
 〒145-0045 東京都小平市学園町1-22-151F  
 電話: 042-348-1127 FAX: 042-348-1127  
 郵便番号: 042-348-1127  
 旧日本軍「731部隊」施設(遺跡)紹介-その5

- ・1995年創刊、500部、B5版、8~12頁、年6回
- ・賛同年会費: 3,000円
- ・tel : 042-348-1127 / E-mail : wa-chiyoko@jcom.home.ne.jp
- ・当館所蔵: 27号(2003年) ~
- ▽119号内容=念願の「731部隊遺跡保存・研究と日中平和交流基金」創設、2018年度総会報告、「戦争の加害パネル展」を開催して、これからの催し、最近の事務局の動き他

# 歴史の1コマを示す貴重な資料

是枝 洋 (元大原社会問題研究所)

ネットワーク・市民アーカイブ（以下、「市民アーカイブ」と私の出会いは、私の手元にあった住民運動の資料のひきとりをお願いしたのがきっかけでした。

## □運動の中で生み出された資料

1994年、私の住んでいる高尾紅葉台団地のすぐそばに八王子南道路を通す計画が公表されました。国道20号のバイパスです。幹線道路の開通が団地の居住環境に及ぼす影響を調査し、その対策をたてるため、自治会に対策委員会がつくられました。委員会は月1回会合を開き、対策を協議し、学習会を開催し、アンケートをとって(3回)住民の意向を確認するなどの活動を行いました。八王子市議会へも請願を3回出しています。国交省相武国道事務所とも何十回も交渉しました。住民向けの機関紙も発行しました。その過程で多くの文書が作成されました。南道路は2010年7月に町田街道まで部分開通したので、自治会としての運動は終わりました。南道路をめぐつ

ての住民運動を継続的に行ったのは紅葉台自治会だけでしたので、この経験は伝えていくべきだと思います。自治会の運動なので、自治会に資料を保存してもらわなければならないが、自治会館にはそれほどスペースはないこと、外部の人に資料を活用してもらわなければならないなどの問題がありました。

## □とにかく集めておく

市民アーカイブの仲介で、八王子市の市史編さん室でひきとってくれることになりました。当時の代表であった杉山弘さんが八王子市史の編さんにも関わっておられて、その縁だったと思います。資料がどう評価されるかは市史の研究者によるのであまり期待しないでほしいというようなことを市の方からいわれたように記憶しています。

私は大原社会問題研究所(以下、大原社研)で以前図書整理をやってきました。大原社研では資料(原資料)といっていました。文書記録のような一次資料から博物資料も含んだ

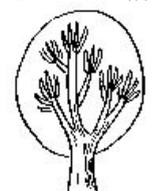
様々なものの総称です)が重視されていて、来館する人はほとんど資料を見に来ます。研究者にとつては、まず一次資料が大事だということです。

大原社研は労働年鑑の編集のために資料を集めていました。資料のなかには当時はゴミみたいなものと思われていたものが、歴史の1コマをしめす貴重な資料になったものもあります。また、人手不足で受け入れたものの、整理できずに積んであったものが、研究者

によって整理され、活用されたものもあります。

こうしたことから言えるのは、資料が散逸しないように、とにかく集めておくことが重要だということです。整理できないからといって受け入れないでいると、捨てられて永久にみることはできなくなります。特に労働運動や住民運動は、資料を保存することに関心の薄いところが多いので、集めておくことが大事だと思います。整理が大変と思われま

が、簡単な情報でもいいから、こんなものがありますと



いうことが公開されていれば利用もできるのです。現物はもちろん貴重ですが、デジタル化してもよい資料はデジタル化して保存すれば場所を節約できるのと、インターネットを通じて公開できる利点があります。市民アーカイブのような機能は歴史を学ぶために大切なものと思います。

(これえだ・ようい会員)

## 組織基盤の強化と資料の活用

ネットワーク・市民アーカイブ定期総会報告

5月19日(日)、2019年度定期総会を開催しました。会員の皆さまには総会記録を同封しています。

会設立当初は「市民アーカイブ多摩」を開館していただくで精一杯だったのが、少しずつ経験を積み、ネットワークと視野が拡がり、次の課題に取り組めるようになってきました。

6年目となる今年の大きな課題は、①会の法人化を含めた組織基盤の強化の検討、②資料の積極的活用により市

民活動資料と出会う機会を増やす、です。また、例年同様に

①「市民アーカイブ多摩」の整備・活用、②学習・研究活動、③広報活動、④組織基盤の強化、⑤他団体との連携、などに努めていきます。

拡大運営委員会は毎月第3金曜日の19時〜21時。正会員の傍聴参加を歓迎しています。また、運営委員会の他に、資料部会・広報部会・企画部会なども動いており、会員であればどなたも参加歓迎です。より多くの方の知恵と力をつ

「1970〜80年代の日韓連帯運動を読む」  
李美淑さん(市民活動研究者)  
会場：市民アーカイブ多摩  
時間：午後4時15分〜6時  
参加費：300円

なげ、市民アーカイブを運営していくことで、私たち市民の力をつけていきたいと思つていきます。今年度も一緒に、よろしく願います。

### 〈これからの催し〉

□「緑蔭トーク」第5期  
第3回 7月27日(土)

「砂川闘争資料の現在

—〈砂川平和ひろば〉の挑戦—  
高原太一さん(大学院生)

第4回 9月14日(土)

「1970〜80年代の日韓連帯運動を読む」  
李美淑さん(市民活動研究者)

会場：市民アーカイブ多摩

時間：午後4時15分〜6時  
参加費：300円

第1回 4月27日

生きる楽しさを伝えたい

— 『共働学舎だより』をつくる —  
千野正世さん、桑木なつみさん  
(共働学舎)

野路むかし語り』などが並べられた。

◆作る過程を楽しむ

毎号の編集の方針は編集会議で決めるが、メンバーの自主性に依るところが大きく、大変だが頑張れるそうだ。各号の方針に沿って原稿を依頼し、集まると、読み合わせをし、イメージに合わせて近藤さんがカットを描き、レイアウトする。多くの人の手が入り、仕上がっていく。

◆人が関わるのが「仕事」

共働学舎は障がいを持つ人が通所したり生活する場所だが、その基本を「仕事」に置いている。収益を上げることだけが仕事ではない。紙折りが好きな人、部屋の入口でお客さんを迎える人、編集作業をする人など、それぞれが仕事だ。デイホームなど関連施設を多く持っているが、一番大きな建物はリサイクル工場で、建物の壁に彫られた「FESTINA LENTE」という言葉こそが共働学舎の指標とするもので、「ゆっくり速く」というラテン語だ。

イラストを描く近藤さん

さんは、子どもの頃、就学を猶予され、学校教育を受ける機会がなく、家でいつもアリや芋虫、昆虫などを描いていたと言う。共働学舎に来た時も「何もできない」と言って絵ばかり描いていたけれど、カットを描くことが仕事になった。しゃれたセンスと観察力、確かな筆致は、手の稼動域が極度に狭いとは思えない。

古紙回収のため毎月、国会議員会館に行っている。大切な仕事で、楽しみでもあり、通信も直接配り、読んだ感想なども聞ける。回収した使用済み封筒は通信送付に使っている。人が関わりあうところに、無駄は何もない。(佐藤啓子「運営委員」)

大原社会問題研究所創立100周年・法政大学合併70周年記念  
シンポジウム「社会問題の現在」(19年3月20日)参加報告

歴史が作られる場に立ち会うこと、そして後世に伝えること

100年の長い歴史をもつ大原社会問題研究所(以下、大原社研)。当会発足のきっかけとなった旧都立多摩社会教育会館市民活動サービスクオーターの資料を大原社研・環境アーカイブズに寄贈・保存していただいているご縁がある。同時に大原社研は、長年にわたって「利用者の資格を問わない専門図書館・資料館」を運営してきた先達という意味でも、私たちが学ぶべきことは多い。

○第1部 記念講演  
「大原社会問題研究所の100年」  
二村一夫名誉教授による記念講演では、創立者大原孫三郎と高野岩三郎との関係など、大原社研の歩みが語られたが、1971年に専門図書館としてスタートする際、利用者制限を設けるべきと主張した研究者側に対し、日ごろ黙々と資料整理にあたっていた大原社研のライブラリアンたちが異議を唱え、「利用者の資格を問わない」方針が確立されたとの興味深い話が紹介された。「誰にでも公開する」姿勢が結果的に高く評価され、「松川裁判」資料などの寄贈が相次ぎ、コレクシヨン充実につながったという。いざという場面で発揮された専門職としての見識と行動力は、記憶にとどめたい。

さて、大原社研が創立された当時の社会動向をひもといてみると、その前年に富山県の一漁村に端を発した米騒動が、そして大正デモクラシーの思潮の下、友愛会をはじめとする労働運動でも労働者による自主的な労働組合化をめざす動きが活発化し、新たな普通選挙運動の展開もはじまっていた。一方、児童労働があたり前

共働学舎さんからは、『共働学舎だより』編集担当の千野正世さん(編集長)、桑木なつみさん、近藤すみえさん(イラスト担当)、編集全体をアドバイザーしている斉藤康一さん、ヘルパーの赤井治子さん、常務理事の田中公明さんが来てくださった。バックナンバーやイラスト原画、聞き書きをまとめた冊子「小



近藤すみえさん

車イス利用者も含まれ、10人以上が編集に関わっている。





「シリーズ「現場」を訪ねる」は、その名のとおり、資料や資料館が生まれた現場を訪ね、資料や施設の見学はもちろん、そこに関わっている人から、生の思いを聴くことを大切にしている。第3回となった昨秋11月17日、明治大学平和教育登戸研究所資料館同資料館を訪ねた。

1937（昭和12）年から45年5月頃まで、旧日本陸軍が開設した「登戸研究所」（正式名称：第九陸軍技術研究所）がこの地にあり、旧陸軍による防諜・諜報・謀略・宣伝戦のためのさまざまな研究や兵器開発が行われていた。

敗戦後、50年に明治大学が研究所の跡地の一部を購入、翌年農学部が移転してきていた。その後、時を経て、同資料館が開設されたのは、2010年のことだ。

私たち総勢15名は、あらかじめ見学を申し込んでいたので、館長の山田朗さんの3時間間にわたるいいねいで熱いガイドにより、戦中にここで行われていたこと、そしてそれらの史実を明らかにしていた高校生や市民の思いを感じることが出来た。

キャンパス内にある「弥心神社」や「動物慰霊碑」、研究所本館前のヒマラヤ杉の並木や消火栓、さらには半地下式の倉庫など、登戸研究所がたしかにこの地にあったことを伝えるさまざまな遺跡・遺物群を巡り、さらにかつて「第二科研究室」として使用されていた現在の資料館内をガイドしていただいた。

資料館内の展示は解説や図表、写真パネルが中心だが、よく整備



されており、登戸研究所がつけられた経緯やその役割について、また川崎市民や地元の高校生による調査がきっかけとなり、同資料館が設立された経緯などが、解りやすく説明されている。同時に、この建物自身が同研究所の研究室の1つだったこともあり、原形に近いかたちで残されているさまざまなパイプ配管や暗室などの構造物に眼がいく。

同館の特徴は、なによりもこれらの遺跡や遺物、古の建物や施設群であり、訪れた人びとが、残存している限りのものを眼にすなるための工夫や、かつての姿を想像するための手立てが、各所に凝らされていることだ。

私たちの市民アーカイブと、この日訪れた同資料館とは、そのたまたまいや性格にそれほど共通点があるわけではないが、人々の思いを大切に、持てる条件を最大限に活かし、館のメッセージを伝えていこうとするその姿勢には、学ぶべきことが少なくなかった。

（杉山弘二運営委員）

であった当時、大原社研が間借りしていた石井記念愛染園には、昼間働く児童のための夜間小学校が開設されていた、というような時代状況も浮かびあがってくる。

### ○第2部 シンポジウム

「社会問題の現在…運動と研究をどのように切り結ぶのか」

しかし、生活問題、労働問題、運動への参画、政治参加、そして貧困を含む社会福祉問題——これら100年前に噴出していたさまざまな社会的イシューは、今日でも形を変えて、私たちの前に立ち現われている。第2部で登壇した、上西充子、西城戸誠、布川日佐史各氏（いずれも法政大学教員）の報告からも、このことが十分うかがわれたように思う。

「ご飯論法」に代表される国会質疑の形骸化を伝えないメディアに対抗し、街頭で国会審議を上映・解説する「国会、パブリック・ビューイング」を展開した上西氏の活動は、主権者と国民の代表機関で起こっている事態とを結びつける政治参加回復の試みといえる。

西城戸氏による、福島事故以前／以後の市民出資型再生可能エネルギー事業・運動への出資者側の意識変化を扱った分析では、出資動機や運動への

参画経験などのファクターが扱われていた。ここでは実践として「運動」とともに「事業」にも焦点が当てられる。

また、社会参加として賃金を保障するドイツの貧困対策と比較して、経済給付なしの支援が前提の「生活困窮者自立支援法」など、近年の日本の政策動向への疑問を述べた布川氏の報告からは、2国間の貧困そのものに對する社会意識の違いが浮かび上がる。

最後のパネルディスカッションは時間不足。しかし、「運動」と「事業」とは、二項対立的なものでもトレード・オフの関係でもないとの西城戸氏の指摘は、運動をきっかけに事業に取り組みむ多くの市民活動にも通じる視点だろう。また西城戸氏は、デジタル・アーカイブの可能性についても言及した。一方、10年前の「年越し派遣村」を例に、文章を書けなかった人も大切な役目をしていたかも知れず、こうした「歴史が作られていく過程」に注意深くあつてほしいと提起した布川氏の発言も印象に残った。

この先の議論を聞きたかったが、むしろこれは、私たち自身の取り組みの中で考えていくべきことかもしれない。

（三浦健二運営委員）

# アーカイブ多摩 19年度

## ◆寄贈継続のお願いと会員募集

総会も終わり、19年度が始まりました。引き続き資料のご寄贈、また、会員として一緒に「市民アーカイブ運動」を担っていただく仲間を募集しています。よろしくお願ひします。

## ◆2018年度実績データ

総会で報告のあった18年度事業のうち、数字データを一部ご紹介します。①開館日72回。②来館者数75人。③データ入力数3091点。④新ファイル作成数72タイトル。⑤ファイル総数1782タイトル。

## ◆19年度運営委員

今年度から新しい運営委員が1人(三浦健)増えました。当会設立当初から関わってきた竹中薫と山家利子が退任したため、11人の運営委員で活動します。

## ◆会員アンケート

### 「市民アーカイブのこれから」

3月に会員アンケートを実施し、40人からご回答をお寄せいただきました。今後の主な2つの課題へのご意見については、以下のとおりです。

#### ①施設規模・運営について

現在の施設規模を維持  
規模を大きくする  
移管先を考える  
どちらとも言えない  
その他

#### ②会の組織形態

任意団体のまま  
法人格取得を検討  
認定NPO法人視野に  
どちらとも言えない

その他、自由記述で、これまでの活動への評価や、今後の活動方針等についても多様なご提案や励ましの声をいただきました。ありがとうございます。ご意見を元に運営委員会で具体的に検討していきます。

## 運営委員会など

2月19日 第11回運営委員会。参加者9人。会員・カンパ者、当番確認、利用者報告(毎回)。18年度事業の達成度確認。19年度事業案検討。議案書作成分担保、各部会から。3月15日 第12回運営委員会。参加者9人。総会議案書確認。19年度事業計画、運営委員候補検討、原発関係資料受入提案検討、駐輪場提供、助成申請・プレゼン報告他。4月19日 19年度第1回運営委員会。参加者9人。議案書最終確認、総会当日役割分担、緑蔭トーク①役割分担、助成申請報告、会員アンケート結果集計報告、大原社研レポート第5期報告他。4月27日 ウム報告他。参加者19人。5月17日 第2回運営委員会。参加者7人。総会参加予定者・役割分担最終確認、19年度事業体制案・部会担当内容検討、緑蔭トーク①感想・反省、②役割分担他。5月19日 総会開催、参加正会員16人、委任状参加20人、賛助会員3人。記念講演会開催、参加者46人。※運営委員会は毎月第3金曜日19~21時。正会員の皆様の参加を歓迎しています。



※2部以上あるミニコミは希望者に差し上げています。

## 会員数(2019年5月)

146人(正会員60、賛助会員86)

### ◆新規入会ありがとつ

- 正会員 川崎保夫さん
- 賛助会員 五郎丸聖子さん
- 永野遼さん、堀越比菜子さん

## カンパありがとう

(2019年2~5月)

- 荒井敏行さん、鈴木美和子さん、高木恒一さん、田中幹子さん、中村光一さん、浜地田鶴子さん、麓 常夫さん、堀内寛雄さん、町村敬志さん、三浦健さん、森井雅人さん、横田順子さん、匿名3人

## 参加者・会員の声

・緑蔭トークの共働学会の皆さまが、とても明るいので元気が出ました。私のこれからの生活に大きな希望がもられました。  
・どのように財源を確保するかが、課題ではないかと思いました。  
・アンケート集計お疲れさま。回答数が少ないのが気になります。  
・羽村駅西口区画整理裁判・東京地裁で2月22日、住民側が勝訴(原告121人)、市が高裁に控訴したので、対応で忙しくしています。  
・紙だけではなくSNSなどで情報公開している活動も多くなってきた今、資料の収集保存という点が難しくなっている。当会の存在を「本質的に理解」する人を確実に増やした方がよいと思います。

## 編集後記

何れともあれ、活動の記録を残すのはとても大事なことです。しかしながら、案外自らの足元の記録はきちんととられていないか、たりませんか。6年目を迎えた当会でも自らの活動記録に目を向け、まとめていく予定です。何らかの形でお披露目することができまよう。 (江・鈴・増)

## 「市民アーカイブ多摩利用案内」

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(8月中旬・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：午後1時~4時 ・入館カンパ：100円~
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7 (多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分)
- ・tel & fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報など)1,700タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。 www.c-archive.jp

